

# 温故知新：宮澤賢治作品における「鉱物性色彩語」考

加藤 碩一<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

「周知のように宮澤賢治の作品は、色彩をあらゆる言葉であふれている。」(芹沢, 1996)という指摘を始め、多くの評者によって言及されているにもかかわらず、「作品の色彩語について、実証、裏付けとなる研究が十分になされたとはいえない。」(大藤, 1993)状況でもあった。その後も色彩語の研究に多くの進展があったが、留意すべき点は色彩に対する認識を賢治と共有する必然性があることである。なぜなら、賢治作品に登場する色彩語は、現在のわれわれが持つ日常的な色彩感や色彩表現(例えば、国語辞典等の解説)、更には専門的な「色彩学」における色彩語の定義や用例などとも必ずしも一致しないからである。特に、鉱物の色合いに依拠する賢治独特の色彩語は、前述の大藤(1993)によって「鉱物性色彩語」と命名されており、その著書巻末における解説で「賢治の色彩への関心は、彼自身の感覚的資質によるだけでなく、学問的にも裏付けられたもの」とも指摘されている。また、後述する『大鑑物學』でも「鉱物の色を記載するに用ふる言葉は、唯記載の目的に適當するものにして、決してスペクトルの色の分類に一致するものに非ず。」とある。したがって、「鉱物性色彩語」は、賢治の時代の鉱物学における色彩表現を十分吟味して論ずべきである。

賢治の「鉱物性色彩語」に関する「学問的に裏付けられた」知見は、大正2～7(1913～1918)年にかけて順次刊行された佐藤傳藏『大鑑物學』(上・中・下巻)に依拠するところが大である(ちなみに、賢治は大正4(1915)年に盛岡高等農林学校地質及土壤教室に入学)。なぜなら、これは当時最新のかつ本格的な鉱物学教科書で、いわばベストセラーでもあり、盛岡高農にも各巻複数冊蔵書されていたのみならず、賢治自身も亡くなるまで手元に置いていた、いわゆる賢治蔵書でもあったからである。とくに、『中巻』の「鉱物通論 第二編 鉱物物理学 第二章 鉱物光学性」の「第三節 暗明」と「第四節 色」は重要である。以下、それらに依拠して作品中の「鉱物性色彩語」について検討する。下線を付した部分が、『大鑑物學』の記述である。

なお、本文中の引用は、『新校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房)による。また、『宮澤賢治語彙辞典』(以下『旧』)、『新 宮澤賢治語彙辞典』(以下『新』)、『定本 宮澤賢治語彙辞典』(以下『定』)、『宮澤賢治 イーハートヴ学事典』(以下『事典』)、『宮澤賢治地学用語辞典』(以下『用』)は『』内のように略記する。また、本号口絵(青木・加藤, 2015)で賢治が実際に学んだ盛岡高農所蔵鉱物標本(順不同。本文中の口絵番号はこれによる)を掲載しているのを参照されたい。

## 2. 金属色

『大鑑物學』では、鉱物の色は元来3種、すなわち金属性の色、濁れるものに付属する色及び透明のものに付属する色に区別されるとし、例えば、黄色では、金黄色・赭黄色・酒黄色が各々に相当するとしつつも、通常は不透明な金属色と透明な非金属色に2分して記述することとした。後述するようにこの区分は厳密ではないが、一応ここではそれに準拠して以下のように「金属色」について検討する。当然、不透明鉱物であるから、その色合いは光の反射に起因するものである。

### (1) 「紅Red 銅紅Copper red 例：自然銅」

いわゆる「赤(色)」であるが、『大鑑物學』では「紅」を当てている。「銅紅」は、現在では「銅赤色」とも称される。なお、「自然銅」は天然に産する金属銅で、淡紅色を呈することが多い。作品中には「銅色」として登場する。「あかがねいろ」という読みは「銅色」の雅語的表現である。「青ぞらは緑いろに濁り、日や月が銅いろになつた」(童話『グスコブドリの伝記』とルビがある場合の読みは明白であり、「そらがへんに濁って、青ぞらは緑いろになり、日や月が銅いろになつた」(童話『グスコブドリの伝記』下書き)と類似した記述も同様であろう。また、「銅いろの上半身」(詩「風と杉」)や「銅色の火」(詩「空明と傷痕」下書稿(一))の「銅」の読みは厳密には決めかねるが、「あかがねいろ」と読むほうが自然である。さらに、「赤銅色」として登場する場合があるが、「(騎手はわらひ)赤銅の

1) 産総研 地質調査総合センター名誉リサーチャー

キーワード：宮澤賢治・鉱物・色彩・金属色・非金属色・青黝・青黒・藍青・橄欖緑・油緑

人馬の徽章だ」(詩「小岩井農場 パート三」)、「月の半分は赤銅」(詩「東岩手火山」)、「赤銅の半月刀」(詩「噴火湾(ノクターン)」)のようにルビがあるので、「(正偏知の)お指の色やはんたうに赤銅いろにひかるだらうか。」(童話『四又の百合』)の「赤銅いろ」も同様な読みとすべきで、あえて「せきどう」とする必然性はない。なお、「赤銅」は、当時は銅に少量(3~5%)の金(一部銀)を加えた合金をも意味した。

(2)「黄Yellow 金黃Gold yellow 例：自然金(口絵3). 古銅黄 Bronze yellow 例：磁黄鉄鉱。」

「金属色」の「黄色」は、黄金やブロンズの黄色である。磁黄鉄鉱 pyrrhotite は、「磁硫鉄鉱」と同義である。磁性を持つ鉄の硫化鉱物で、ブロンズ色を呈する。作品中の金(色)の表記例はかなり多様で、詳しくは『用』を参照されたい。

(3)「褐Brown 金銅褐Pinchbeck brown 例：磁黄鉄鉱。」

真鍮(黄銅)は、銅と亜鉛の合金で、18世紀にイギリスのChristopher Pinchbeckによって発明されたといわれる。作品中では、金属色の「褐(色)」の用例は特定したいが、不透明さの観点からは「褐色タイル」(詩「浮世絵展覧会印象」)が相当する。

(4)「白White 銀白Silver white 例：自然銀、錫白Tin white 例：水銀・輝コバルト<sup>マ</sup>鉱(口絵4)。」

「金属色」の「白」は、その依拠する金属鉱物の新鮮で不透明な白色によるが、現実の鉱物は砂白金やオスミリジウム(口絵2)を除いて以下のように不安定である。

自然銀は、等軸晶系の元素鉱物の一種で、銀白色を呈するが、空気に触れると黒くなる。賢治が大好きだったといわれる「ぎんごろ(銀白楊)」の木は、ヤナギ科の落葉高木で、葉の表面の緑色に対し裏面には白毛が密生し、それが風に揺られると日に照らされて銀色を呈することから命名されたといわれる。同様なモチーフは童話『おきなぐさ』の表現にも登場する。

錫は、常温常圧での結晶構造はβスズ(白色スズ)と言われる金属で、これが「錫白」と言われる色合い(銀白色)であるが、低温(13°C以下)でαスズ(灰色スズ)となる。賢治は、これを作品中で「錫病」と表現する場合がある。例えば、詩「津軽海峡」では海水の色を「また錫病と伯林青<sup>ブルシェンブルグ</sup>/水がその七いろの衣裳をかへて」と述べている。

水銀は、常温常圧で凝固しない唯一の金属で、銀の様な白い光沢を呈する。作品では、その物理的性質を生かして光や水の色として用いられる。例えば、「水銀いろのひかりのなかで」(詩「春谷暁臥」)、「川が鉛と銀とをながし

(詩「一昨年四月来たときは」)、「水銀いろの小流れは」(詩「いま来た角に」)などや詩「つめたい海の水銀が」などの表現がある。

純粋なコバルトは、銀白色の金属であるが、輝コバルト鉱cobaltite(口絵4)はコバルトの砒素硫化物、CoAsSで、独特の赤みを帯びた銀色の鉱物である。空気に長時間触れさせておくと表面が紫がかった灰色または灰黒色に変色することがある。なお、詩「コバルト山地」は、通説では「北上山地」のことと解されており、筆者も同意するが、藤原(1936)は「コバルト絵具(濃青色)のこと。」(注：顔料のコバルト青、CoAl<sub>2</sub>O<sub>4</sub>あるいはCoO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)と記しているように、ここでは山間の深い青の色合いを意味する。

(5)「黝Gray 鉛黝Lead gray 例：方鉛鉱(口絵10)・輝水鉛鉱(口絵8)・鋼鉄黝Steel gray 細粒にせる鋼鉄の新鮮なる者の色にして、自然白金又は黝銅鉱の如し。」

「鉛黝」は、作品中には直接の用例はないが、いわゆる慣用色としての「鉛色」に近く、不透明で光沢のない青味を帯びた灰色を呈する。陰気で憂鬱な気分になる曇天の空を「鉛色の空」と表現する用例は一般に知られている。「しづかに鎖すその窓は/鉛のいろの水晶」(詩「プラットフォームは眩くさむく」)(注：「鎖す」は「さす」「とざす」と読めるが、語音数からみて後者。「まぶしい」の雅語的表現としては「まばゆい」とも読む)とある。事例の方鉛鉱galena, PbSは、主要な鉛の鉱石鉱物で、鉛灰色を呈する。輝水鉛鉱molibdenite, MoS<sub>2</sub>はモリブデンを含む主要鉱石で、鉛灰色を呈する。賢治のモリブデンとその採掘についての関心は、童話『風[の]又三郎』などに窺われる。

「鋼鉄黝」は、作品中では「灰色はがね・灰いろはがね・はいいろはがね」として頻りに登場する。暗い空の表現として、「灰いろはがねの天末」(詩「温く含んだ南の風が」)、「灰いろはがねのそら」(詩「薙露青」)、「空いっぱい灰色はがね」(短編『秋田街道』)や「灰いろはがねの夜のそこ」(詩「冬のスケッチ」二六)などがある。さらに「空の鋼」(短編『柳沢』)ともある。また、「これはこれ、はがねをなせる/やみの夜のなつかしき灰いろなり」(詩「冬のスケッチ」五)や「鋼の空」(童話『鳥の北斗七星』や短歌に多出)という表現も同様な色合いであろう。このほか、「心象」(怒り)の表現として、有名な詩「春と修羅」の冒頭に「心象のはいいろはがねから」とあり、また「灰いろはがねのいかり」(詩「冬のスケッチ」四四)がある。また、類似した表現で「灰<sup>かいちゆうてつ</sup>鑄鉄のいかり」(詩「卑屈の友らをいきどほろしく」)ともある(注：ただし「鑄鉄」は「鋼」に比して多くの炭素を含み軟らかいから、「いかり」の程

度の表現に違いがある). いずれにしても先が見えない不透明な金属色としての灰色のイメージである. ここで述べた不透明な灰色である金属色の「黝」と、透明な灰色である非金属色の「黝」があり、後者は後述する.

(6)「黒Black 鉄黒Iron black 例：磁鉄鉱 (口絵12)」

「鉄黒」は、作品中では「鉄いろ・鉄色」として登場する. 大部分が背景としての暗い空の色の表現で「黝」と「黒」の色合いの関係から見て、「鉄黒色」の方が「灰色はがね」(鋼鉄黝)色より黒い(暗い)色調を表している. 「鉄いろの背景」(詩「東岩手火山」)<sup>てついろ はいけい</sup>(詩「心象スケッチ外輪山」), 「鉄いろのそら」(詩「北いっぱい星ぞらに」)<sup>てついろ</sup>, 「鉄いろをしたつめたい空」(童話『氷河鼠の毛皮』), 「冬のはじめの鉄いろの晩」(詩「うすく濁った浅葱の水が」) 下書稿(四))とあり、例外的に「(魚が)自分<sup>じぶん</sup>は鉄いろ<sup>くろがね</sup>に変<sup>へん</sup>に底<sup>そこ</sup>ばかりして」(童話『やまなし』)という表現がある. ちなみに童話『檜ノ木大学士の野宿』では、黒色を呈する鉄の酸化鉱物である擬人化された「磁鉄鉱」の「ジッコさん」が間接的に登場する.

### 3. 非金属色

鉱物の色は、すでに明治時代初期に例えば松本(1881)

『鑛物小學 全』で、「白, 灰, 黒, 藍, 緑, 黄, 赤, 褐」の8種に区分されている. 『大鑛物學』では、「非金属の色は甚だ多く、ヴェルナー<sup>ママ</sup>の分類に従えば、主なるもの八つあり.」として、それに準じた解説をしているが、もちろん日本語訳は佐藤による(注: Abraham Gottlob Werner (1749 ~ 1817) は、当時のヨーロッパで指導的地位にあった著名なドイツの鉱物学者・地質学者). いうまでもないが非金属の鉱物は、薄片として顕微鏡下では光を通過させる(透明~半透明).

#### (1) 白 white :

本来、白は、灰色(グレー)・黒とともに、無彩色で、色みをもたず、明度の違いによって色を識別されるが、以下に示すように鉱物性色彩語では、わずかに他の色味を加えて表記されることが多い. すなわち、雪白 snow white (例: 大理石)・乳白 milk white・黄白 yellowish white・赤白 reddish white・黝白 greyish white・緑白 greenish white (例: 滑石 (口絵31))と細分される. 石英や瑪瑙(口絵16)や玉髓などの珪酸(塩)鉱物は、本来無色・白色であるが、微量の不純物によって見かけ上、さまざまな色合いを呈するので、こうした色彩語で記述された. しかし、

作品中に直接語彙として登場するのは「白」を除いて「乳白 Milk white 少しく青味を帯びたる白色にして、例へば一種の玉髓の於るが如し。」のみである. すなわち詩「沃度ノニホヒフルヒ来ス」下書稿(一)に「…ソノトキ朝日降りシカバ/樹カバヤキテ乳白ノ/花ヲ梢ニミタシツツ…」とある. 上記説明に依拠すれば「乳白ノ花」は、単なる白色の花弁を有する花を意味するだけでなく、花弁を通して背後の葉の青(緑)色が反映されている(少しく青味を帯びたる白色)状況を示唆するかもしれないが、他に用例がなくさらなる検討を有する. この他、いわゆる「乳色」もこれに包含されると思われ、「いちめんのうめばちさうの花びらはかすかな虹を含む乳色の蛋白石」(童話『十力の金剛石』)のように、やはりわずかに他の色味を加えて表記される場合もある. しかし、「(りんごの)乳いろの花」(詩「あしたはどうなるかわからないなんて」), 「乳いろガラス」(詩「浮世絵展覧会印象」), 「くろもじはかすかな匂を霧に送り霧は俄かに乳いろの柔らかなやさしいものを諒安によこしました。」(童話『マグノリアの木』、注: ルビは筆者による), 「(霧は)うすい乳いろのけむりに変り」(詩「朝に就ての童話的構図」)のように、前述した「濁れるものに付属する色」としての単なる「不透明な乳のような白色」を意味する場合もある.

#### (2) 黝 gray :

一般的な用法と比較するために代表的な国語辞典・漢和辞典の説明を以下に列挙する.

・『新漢和辞典 四訂版』(大修館書, 1979): 「黝」①あおぐろ(あをぐる). 青みがかかった黒色. ②くろい(黒). ③くろつち. また、地を黒くぬる.

・『広辞苑 第二版補訂版』(岩波書店, 1981): 「あおぐろ(青黒)」①青みをおびた黒い色. 「黝(よう<sup>ママ</sup>)」とも書く. ②染色の名. 濃い虫青(むしあお)色. ③襲(かさね)の色目. 表は濃い黒青色. 裏は青色. ④たてがみの黒い青馬の毛色.

・『広辞林 第五版』(三省堂, 1973): あおぐろ(青黒)①青ばんだ黒色. ②馬の毛色. 青と黒との混じったもの. ③襲(かさね)の色目. 表は濃い青. 裏は普通の青色.

・『学研国語大辞典 第二版』(学習研究社, 1988): 「あおぐろい(青黒い・黝い)」黒味をおびて青い. また、青みをおびて黒い.

いずれも「青味がかかった黒」を意味する点は共通する. 『定』でも、「黝は賢治の好んで用いる色彩表現だが、これ一字でも青黒い意. したがって、青を冠して薄青黒い形容

となる。」とある。ところが、『大鑑物學』では金属色・非金属色とも「黝 Grays」と「灰色」の意味に用いている。

賢治作品において、例えば同じモチーフである次の短歌を比較してみる。

「うす黝く感覚にぶきこの岩は夏のやすみの夕霧を吸ふ」(『歌稿A』330)

「黝くして / 感覚鈍き / この岩は / 夏のやすみの夕霧を吸ふ」(『歌稿B』330)

「鈍感の、ねずみ色なる、この岩は、七月の午後の、霧を吸ひたり」及び「おろかなる、灰色の岩の・・・」(雑誌発表の短歌「灰色の岩」と題された3首のうちの2首)

語の対応を見れば、賢治は「黝」を濃淡の差はあるにしても「灰色」の意に用いていることは明らかである。この他、「黝」を訓読みして用いる例は以下のように数多くあるが、やはり濃淡の別はあるとしても基本的には「鉱物性色彩語」としては「灰色」と解すべきであろう(前述の松本(1881)でも明か)。

同様な色合いを呈した表現として、

①岩や土壌そのものの色合いの表現：「黝い岩」(「丘陵地を過ぎる」)、「黝い乾田」(詩「山火」)、「黝い田圃」(詩「山火」下書稿(四))。また、極めて黒に近い濃い灰色(後述の「黒黝」ないし「暗黝」)を表す場合もある。例えば、「黒む山上」(『歌稿A』4)と「黝む丘」(『歌稿B』4)である。

②薄暗い林などの表現：「[ひのきの黝い]髪」(詩「山火」下書稿(二))、「防雪林の黝くいぢけた杉並」(詩「山火」下書稿(一))、「黝くいぢけた防雪林の杉並」(詩「清明どきの駅長」下書稿(一))、「黝む松」(詩「運転手」)、「黝んだ松林」(童話(習作)『光と後光』)、「牆林は黝く」(詩「凍雨」)、「家ぐねは黝く」(詩「凍雨」下書稿(二)) (注：「やぐね」は家の周りを囲む防風林・屋敷林)。

③他の色合いを加味した表現：「茶色に黝んだまつの列」(詩「鳥」、後述の「煙黝」参照)、「東のそらの黝んだ葡萄鼠」「黝んで濁った赤い栗の稈」「黝んで赤い栗の稈」(詩「しばらくぼうと西日に向ひ」)、「そらのふちは沈んで行き、松の並木のはてばかり黝んだ琥珀をさびしくくゆらし」(詩「女」)、「山男の」黝んだ黄金の眼玉」(童話『おきなぐさ』)などもある。

④社や鳥居などの表現：「<sup>シユク</sup>部落なせるその杜黝し」(詩「うからもて台地の雪に」)。

「[赤⇒②黒⇒黝]い小さな[鳥居⇒②祠⇒鳥居」(詩「人首町」下書稿(一))、「黝い小さな鳥居」(詩「人首町」下書稿(二))のように本来の色が日の移ろいの中で暗くなっていく情景を表現している場合もある。

⑤管藻(すがも・すげも)：一般には海草の一種をいうが、淡水産の藻の一種にもある。

とくに前者はリボン状で、馬にかけて蠅よけに用いたことを踏まえて「黝い管藻の袍」(詩「悍馬」下書稿(二)(三))、「黝き管藻の袍」(詩「悍馬」(二))や「黝い管藻の蠅よけ」(詩「悍馬」下書稿(三))の表現があるが、この場合はむしろ「緑黝」に近い色合いを意味するあいまいさがある。「うるはしの海のピロード昆布らは寂光のはまに敷かれひかりぬ。」(「書簡中の短歌175」)も、直接には色合いを記する鉱物性色彩語は登場しないが同様の「緑黝」であろう。

⑥その他：「水黝き」(詩「林の中の柴小屋に」)、「黝ぶり滑べる夜見来川」(詩「春」)。

「まばゆい<sup>くろ</sup>黝と白との雲」(詩「嬰兒」下書稿(一)(二))、「黝い<sup>スネールタービン</sup>蝸牛水車」(詩「雪と飛白岩の峯の脚」(詩「詩への愛憎」)、「にがきわらひを / 或ひは燃ゆる / さては黝める」(詩「菱花」下書稿(一))ともある。

「黝」を細分して、灰黝 ash gray (純粹の黝。例：黝簾石)・煙黝 smoke gray (少し褐色を帯びた黝色。例：燧石)・青黝 bluish gray・緑黝 greenish gray (例：輝石(口絵30))・黒黝 blackish gray・暗黝 dark grayとしているが、語彙そのものの大部分は作品に登場しないので割愛する。このうち、作品に登場する「青黝」については「青黒」と比較して後述する。

### (3) 黒 black :

物体表面に当たった光がほとんど吸収されると黒く見えるが、100%吸収する物体は存在しない。「ZYPRESSEN 春の一行 / くるぐると光素を吸ひ」(詩「春と修羅」)という比喩的な表現がある。

・<sup>かぐろ</sup>緞黒 velvet black (純粹の黒色。例：黒曜石(口絵32)・電気石(口絵27))

「緞黒」は、古い表現で、『万葉集』に黒髪表現として「かぐろき髪」とある。『蒼冷と純黒』という戯曲断片の「純黒」に相当する。事例の鉱物名を用いた「黒曜ひのき」(詩「風景とオルゴール」)や「この屋根は稜が五角で黒電気石の頭のやうだ。」(童話『ガドルフの百合』)などの表現があるが、いずれも比喩的表現である。

「黒曜石」は、「黒曜岩」(流紋岩～デイサイト質のガラス質火山岩)のことで、盛岡高農所蔵標本でも北海道産や長野産の「黒曜岩」があり、佐藤(1923, 1925)『岩石地質學』でも「黒曜岩」と記述している。しかし、一方で長らく「黒曜石」と慣用されてきたので、賢治も童話『銀河鉄道の夜』や童話『台川』では「黒曜石」を用いている。

事例の「電気石」は、そのうち黒色を呈する黒電気石・鉄電気石 schorl (口絵27)のまっ黒な色合いを例としている。

・青黒 bluish black (例：黒コバルト)

酸化コバルト (Ⅱ) 結晶は黄緑から赤色を呈することが多いが、粉末にすると灰色から黒色となる。「青黝」と比較して後述する。

・黝黒 grayish black (例：試金石)

事例の「試金石」は、貴金属を含む鉱石や合金の質を調べるためにこすりつけ、その条痕を比較するのに用いられる黒色で緻密な石である。日本ではこれに相当する古来の語は「金付石」で、一般に黒色の珪質粘板岩を用いた。賢治らが盛岡高農時代に調査報告した『盛岡附近地質調査報文』で、川目小学校東方の珪板岩について「破面介殻状にして黒色を呈し那智石 (試金石) に類す。」とあるが、作品には直接登場しない。

・緑黒 greenish black (例：輝石 (普通輝石。口絵30))

「輝石」とくに「普通輝石」は緑色を帯びた黒色を呈する。作品や雑纂では「黒緑」として登場し (厳密には「黒緑」と「緑黒」は異なるが、賢治は他にも例があるように (「褐黒」参照)、作品中では語順を変えて用いることがある。以下のように松類や杉、唐檜、赤楊、犬樞またはそれらからなる並木や森の黒ずんだ緑色の表現に用いられる。

「黒緑の松山」(詩「毘沙門天の宝庫」)・「濃い黒緑の松」(詩「あかるいひるま」)・「黒緑な松の梢」(詩「三原第二部」)・「並木は松の黒緑の列」(詩「ラルゴや青い雲滄やながれ」下書稿 (二))・「黒緑の鱗松」(詩「小作調停官」)・詩「あんまり黒緑なうろこ松の梢なので」・「黒緑とどまつの列」(詩「オホーツク挽歌」)・詩「黒緑の森のひまびま」(杉の)「黒緑の葉」(詩「杉」下書稿 (一))・(杉の)「葉は黒緑の藻に見える」(詩「杉」下書稿 (二))、「黒緑赤楊のモザイク」(詩「雲とはんのき」)、「黒緑のいぬがや」(詩「溪にて」)・「黒緑の犬樞」(詩「滝は黄に変わって」)などと頻出する。また、「黒緑正円錐の独乙唐檜」(「修学旅行復命書」)ともある。

・褐黒 brownish black (例：褐炭 (口絵33))

作品では「黒褐 (色)」として使われる。「その黒褐の腐食の量」(詩「種山ヶ原」下書稿 (一) パート二)とあり、童話『ガスコンブドリの伝記』(下書稿)で、(煙突から出る煙についてブドリは)「黒褐色がいちばん普通です。」と登場する。また、事例にある「褐炭」は、「亜炭は・・・炭化の程度高からずして、褐炭と埋木との中間にある性質を有し、木理猶判然として存し、石炭に乏しき地方に於ては、岩木又は木炭と稱して盛んに採掘せらる。」(佐藤, 1925)と説明され、「亜炭」はほぼ「褐炭」に含まれるが、

行政上名づけられた日本独自の名称である。北上川のいわゆる「イギリス海岸」で賢治が化石採集を案内した東北帝大助教授 (当時) の早坂一郎が、大正4 (1915) 年に提出した東北帝大卒業論文が「仙台広瀬川河床の埋もれ木について」(英文) で、当時広瀬川産の仙台亜炭を用いた埋もれ木細工は有名であった。作品には、「亜炭のかげら」(散文『イギリス海岸』)、「褐炭のけむり」(詩「岩手軽便鉄道一月」下書稿)、「褐の炭燃す炉」(詩「冬のスケッチ」一二下書稿)、「亜炭の火」(詩「早春」) 同下書稿で「褐の炭燃す」とあり、同下書稿 (三) では「はた褐炭の赤き火ならず」などと登場する。

・青黝 bluish gray と青黒 bluish black

英語名を見れば明らかのように、前者は「青味を帯びた灰色」で、後者は「青味を帯びた黒色」を意味し、より濃い (暗い) 色調を示す。前者は、音読みでは「せいゆう」、訓読みでは「あお (を) ぐろ」ないし「あお (を) ぐろ」である。

作品中では、「青黝み 流るゝ雲の淵に立ちて / ぶなの木 / 薄明の六月に入る。」(「歌稿 [B] 652」) とあるように夕方から夜に移りゆく情景を詠う表現に用いられている。同様に「空は青黝い淵になりました。」(童話『まなづるとダアリヤ』・『連れて行かれたダアリヤ』(『連れて行かれたダアリヤ』初期形)、「空は青黝い淵になりました。」(童話『連れて行かれたダアリヤ』)、「気圏の淵は青黝ぐると澄みわたり」(短編『柳沢』)、「そこらの草も青黝くかはってみました。」(童話『ポラーノの広場』)、「青黝い斜面」(童話『ガドルフの百合』) などの表現もある。これらに対して「青黒い夜の空」(童話『鳥の北斗七星』)、「青黒いつるつるの蛇紋岩」(童話『種山ヶ原』)、「ペンが配れる、青黒の汁」(『雑誌発表の短歌5』) などの用例をみると、明らかに「青黒 Bluish black」は「青黝 bluish gray」よりも黒に近い濃い青の色調として用いられている。また、「青黝い混淆林」(詩「郊外」下書稿 (四)) や「青黒い混淆林」(詩「山火」) さらには「まっ黒な混かう林」(詩「郊外」下書稿 (三))・「まっくろなくなるみばやし」(詩「薙露青」) などの用例からも、「青黝い」→「青黒い」→「まっ黒」の順に濃くなっていくことが窺える。

したがって、以下の「青黒」の用例もそのような色調として解すべきであろう。すなわち、「溺れ行く人のいかりは青黒き霧とながれて人を灼くなり」(「歌稿A」684)、「それからさきがあんまり青黒くなつてきたら」(詩「小岩井農場パート四」)、「山の方は青黒くかすんで光るぞ。」(詩「小岩井農場 第五綴 第六綴」)、「あとが青黒くてどうも

いけない)、「憎むべき「隈」辨当を食ふ」,「青黒い方室」(詩「病」),「青黒く淀んだ室」(短編『あけがた』),「山の方は青黒くかすんで光るぞ」(詩〔小岩井農場 第五綴〕),「雲たち迷う青黒き山」(詩〔朝は北海道の拓殖博覧会へ送るとて〕),「青黒い葉」(童話『黄色のトマト』),「まはりもみんな青黒いなまこや海坊主のやうな山だ。」「谷を遡つてゐるとまるで青黒いトンネルの中を行くやうで」(童話『なめとこ山の熊』),「なんとら今日のそら、<sup>(ひよん)</sup>変たに青黒くて深くて海みだいだべ。」(童話『種山ヶ原』)など。

また、「青」の代わりに「蒼」を用いる場合もある。詩〔北いつぱいの星ぞらに〕では、推敲の過程で、「青黝いカステラ」→「蒼黝いカステラ」(同下書稿(二))、「蒼くくすんだカステラ」(同下書稿(三)(四))、「蒼くくすんだ<sup>カステラ</sup>海綿体」(定稿)となっている。

さらに、「蒼黒いくらやみ」(詩「光の素足」という用例からもわかるように「蒼黒い」方が「蒼黝い」よりも濃い(暗い)色調を意味する。したがって、空の色合いも「蒼黒い空」(童話『学者アラムハラドの見た着物』)の方が「蒼黝い空間」(童話『山地の稜』)や「げに蒼黝く深きそらかな」(詩〔東京〕)よりも暗く、水・海の色合いも「(鹹水の)青黒さがすきとほるまでかなしいのです。」(詩〔堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます])の方が「海か陸かたゞ蒼黝く燃える」「海は蒼黝くて見るからに冷たさうだ。」(童話『風野又三郎』)よりも暗い表現と解すべきである。ただし、「(ここは蒼ぐろくてがらんとしたもんだ。)(詩「春光呪〔詛〕)や「蒼ぐろい水あかり」(童話『双子の星』)のようになかな表記もあり、この場合は「蒼黝い」「蒼黒い」のどちらであるか直接的には区別しがたい。

#### (4) 青 blue :

・藍青 prussian blue (純粹の青色. 例: 青玉 (注: サファイア)・藍晶石 (口絵25))

『国語辞典』では、藍青色：藍色を帯びた青色と述べられている。また、和名で紺青と呼ばれる青色顔料は、1704年ドイツのベルリンで発見されたため、その地のドイツの旧王国名・州名のプロイセンに由来して「プルシアンブルー (Prussian blue)」と呼ばれるのが一般的である。日本で「プルシア藍」ともいう。また、「ベルリンの青」という意味を込めてベルリンブルー (Berlin blue) と呼ばれることも多い。漢字で「伯林青」と表記され、日本でベレンスとも呼ばれるが、これはベルリンを表すオランダ語 Berlijns が変形したものである(武井, 1973)。鉄のシアノ錯体に過剰な鉄イオン加えることで得られる濃青色

沈殿物からなるフェロシアン化第二鉄を主成分とする顔料で、製法によりやや緑みの青から、やや紫みの青までさまざまな異名がありプルシアンブルーはその1つ。「見給へ新らしい伯林青を/じぶんでこてこて塗りあげて/置きすてられたその屋台店の主人は」(詩〔同心町の夜あけがた〕),「みづから塗れる伯林青の、むらをさびしく苦笑ひ」(詩「短夜」),「山はひとつのカメレオンで/藍青やかなしみや/いろいろの色素粒が/そこにせはしく出沒する」(詩〔かぜがくれば])とある。

・藍定青 indigo blue (黒緑色を帯びた青色. 例: 青電気石 (注: インディコライト))

「藍定青」は、「藍靛」の活字ミスではないか。インディゴ(英: Indigo)は青藍を呈する染料で、顔料としても用いられる。事例の「青電気石」は、「藍電気石」ともいわれ indicolite や Indigolite と綴ることもある。青色ないし黒色を呈する電気石 tourmaline (トルマリン)の一種。作品中で「電しんばしらの影の藍靛藍靛や」(詩「丘の幻惑」)は、染料の青さを用いたものであろう。「藍靛いろの影」(詩〔たんぼの中の稲かぶが八列ばかり])という用例がある。「インデコライト」(詩「函館港春夜光景」)(加藤, 2011 参照)も登場する。

・アズア青 azure blue (美な青色. 例: 藍銅鉱 (口絵22))

azure は azure stone 「青金石」の石の色から来ている。色合いとしては、「紺碧」に相当する。事例の藍銅鉱,  $Cu_3(CO_3)_2(OH)_2$  は、孔雀石,  $Cu_2(CO_3)(OH)_2$  と組成がきわめて類似し、鉱物結晶としてよく共生する。賢治が学んだ盛岡高農所蔵標本に見事な両者の共生する鉱物標本がある(口絵22)。詩「オホーツク挽歌」に「海面は朝の炭酸のためにすつかり錆びた<sup>ろくせう</sup>緑青の<sup>アズライト</sup>ところもあれ〔ば〕藍銅鉱のところもある。」は、これにイメージを触発されたのかもしれない。「炭酸」は炭酸基  $CO_3$  を意味し、すなわち両鉱物を暗示し、とくに緑青は孔雀石の主成分なので、「孔雀石」を意味する。また、「向かふの海が孔雀石いろと暗い藍色と縞になってゐる」(童話『サガレンと八月』)ともある。海面が光の加減で藍色を呈したり、やや明るい緑色(孔雀色)を呈してうねるのは珍しいことではないが、その表現に共生鉱物の色合いを用いる点にさすがに鉱物好きの賢治の非凡さを感じる。

・天青 heven blue/sky blue (少し緑色を帯びた淡青色. 例: 天青石 (口絵23))

事例の天青石 Celestite の組成は  $SrSO_4$  である。詩「流水」に「天青石まぎらふ水は、/百千の流水を載せたり。」と

あり、誤記とすれば「<sup>セレストライト</sup>天青石」か「<sup>アズライト</sup>藍銅鉱」のどちらかであるが、鉱物学的には色合いを含めて全く異なる鉱物を取り違えたとは考えにくい。むしろ賢治は意図的にこのように表現したのではないか。すなわち、天青色は、水面に浮く氷の色合いを表現し、後者は氷を乗せた深みの水の藍色を表したもので、両者を一括して表現した若干遊び心を交えた表現とみたい。「<sup>セレストライト</sup>藍銅鉱」でも同様な表現が可能だが、それでは五七調のリズムが崩れてしまう。北出(2010)は「おそらく賢治はこの石(注:天青石)を知らなかっただろう。」と憶測しているが、盛岡高農所蔵の教育品製造合名会社の鉱物標本150種(No.78 Celestite 天青石 Luneberg, Hannover)及び京都島津製作所製鉱物標本180種(No.102 Cerestaine 天青石 北米カリフォルニア・ローレン)には含まれている(口絵23)。

・**紫青 violet blue** (例: 蛍石 (口絵11)・紫水晶 (口絵14))

事例の蛍石 fluoriteの主成分は、CaF<sub>2</sub>で本来は無色～灰褐色であるが、含まれる不純物によってさまざまな色合いを呈する。紫水晶 amethyst (アメシスト)は、おもに二酸化珪素からなる石英(水晶)のうち、紫色を呈するもの。賢治の時代には、マンガンを含むためと考えられていた。ここでは、「ラベンダーがかっている青色。青味がかったすみれ色を意味する」と説明されている。作品中では「紫青」という用語は直接登場しないが、童話『十力の金剛石』では、「たうやくのつぼみ」が「紫水晶の美しいさきを持ってみました」と表現されている。

#### (5) 緑 green :

・**翠緑 emerald green** (純粋の濃緑色。例: 緑玉 (口絵28))

「緑玉」は、一般的に「緑色の玉」を意味するが、特に緑色の宝石の代表である「エメラルド・翠玉」である。鉱物学的には濃緑色透明な緑柱石 beryl (ベリル)で、色は微量のクロムCrやバナジウムVに起因する。化学組成はBe<sub>3</sub>Al<sub>2</sub>Si<sub>6</sub>O<sub>18</sub>である。

岩手県の釜石湾内に位置する緑の茂った小島の表現に「釜石湾の一つぶ華奢なエメラルド」(「峠」下書稿では「緑柱石」と用いている。また、童話『風野又三郎』で主人公が空から下を眺めた際に「さっきの島などはまるで一粒の緑柱石のやうに見えて来る」と、やはり緑の茂った島の表現に用いられている。詩「空明と傷痕」下書稿(一)に「緑青いろの外殻を着て/しめった緑宝石の火をともし」とあり、詩「北いっぱい星ぞらに」下書稿に「黄水晶とエメ

ラルドとの/花粉ぐらみの小さな星が」と表現されている。

・**草緑 grass green** (黄色を混ぜた美緑色。例: 緑輝石)

事例の「緑輝石」は、オンファス輝石 omphacite (オンファサイト)のことで、輝石グループの中で、翡翠輝石・硬玉 jadeite (ジェダイト) (口絵29)と普通輝石 augite (オーグサイト) (口絵30)の両者を豊富に有するもの。作品中では「草緑」という用語は直接登場しないが、「生しののめの草いろの火」(詩「原体剣舞連」)や「やはらかな草いろの夢」(詩「青森挽歌 三」)と表現されている。

・**山緑 mountain green** (青色を帯びた緑色。例: 緑柱石 (口絵28))

この用例はないが、事例の緑柱石は、「さっきの島などはまるで一粒の緑柱石のやうに見えて来る」(童話『風野又三郎』)と登場する。

・**林檎緑 apple green** (少し黄色を帯びた淡緑色。例: 緑玉髓 (口絵18))

事例の緑玉髓は、クリソプレーズ chrysoprase のことで、青林檎色で半透明の玉髓をいう。色はニッケルに起因するという。「わずかに黄みのあざやかな緑。リンゴの果実(apple)の表皮のような緑である。」(武井, 1973)や「強い黄みがかった緑色を想起させる。」(『定』)と、黄みの強弱についてやや異なる色調の説明があるが、「わずかに～少し」黄みがかった青色とする。作品では、「水そばの苹果緑と石竹」(詩「栗鼠と色鉛筆」)、「そこらはみづきのうすい赤からアップ[ル]グリーン」(詩「三原 第二部」)、「一面のapple greenの草原」(詩「三原 [第] 三部」)、「なみなす丘はぼろぼろと青きりんごの色に暮れ」(詩「岩手公園」)などと様々な表現で登場する。また、いわゆる『兄妹像手帳』に「林檎青」と記されている(p.137～138)が、ほぼ同義であろう。

・**橄欖緑 olive green** (褐黄色を混ぜた暗緑色。「かんらんみどり」とも読める。例: 橄欖石 (口絵24))

オリーブは、日本には自生しておらず、明治41(1908)年にアメリカから導入した苗木が、香川県小豆島で育ち、大正時代初期には搾油が出来るほどの実が収穫されたという。「橄欖石」は、通常は黄緑色のものが多いが、鉄の含有量によって白～黒まで色調が変化する。ここでは「黒緑」よりやや明るい色調をいう。作品では、「穂をだし粒をそろへた稲が/まだ油緑や橄欖緑や/あるいはむしろ藻のやうないろして」(詩「小作調停官」)と次項の「油緑」とともに稲穂の色調表現に用いられている。

・**油緑 oil-green** (橄欖油の色。例: 緑柱石・瀝青岩)

いわゆるオリーブオイルの色合いで、とくに若い実を絞っ

たものは葉緑素が残り緑色になる。中国語の色名に「油緑(ユーリュウ)」がある。佐藤は、原著のドイツ語表記を直訳したものであろう。作品には、「木の芽が油緑や喪神青にほころび」(詩「夏」)、「がさがさした稲もやさしい油緑に熟し」(詩「宗教風の恋」)、「……はたけのへりでは/麻の油緑も一れつ燃える……」(詩「しばらくぼうと西日に向ひ」)と植物の色調表現として登場する。「橄欖緑」より明るい。また、いわゆる『兄妹像手帳』に「まだ油緑や/橄欖緑や」と記されており、賢治の深い関心が窺える。さらに、「ひるは緑油のしたたりて」(詩「こらはみな手を引き交えて」下書稿(二))と賢治が良くやるように語順を変えた表現もある。

・葱緑 leek-green (葱葉のように緑色で、少し褐色を混ぜ。例：緑石英(口絵18))

『定』では、「国語辞書等にはない語だが、賢治の造語とも思われぬ。おそらく英語の leek (西洋ネギ) の語を用いた色彩表現 leek-green の訳語として当時誰かが用いていたのであろう。英語辞書には「青味がかかった緑色」とある。」と出典をあいまいに説明しているが、『大鑛物學』に記されている。倉石武四郎(1969)『岩波 中国語辞典』にもあるが、「葱緑(名) あざやかな黄緑色」という異なる説明である。事例の「緑石英」の英名は、prase; leek - green stone; leek - green quartz; mother of emerald などである。「褐色を混ぜた緑色」という説明にあるように、鉱物・岩石では両者の色が共存することがままある。例えば、顕微鏡下での同一角閃石薄片の観察で、部分的な組成の違いにより緑～茶色を呈することがある。したがって、作品で「葱緑の天」(詩「鳥の遷移」)、「葱緑のかゞやく天」(詩「浮世絵」下書稿(三))、「葱緑のそら」(詩「国道」下書稿)、「葱緑のかゞやくそら」(詩「浮世絵」下書稿(一)(二))、「そら葱緑にうち澄みて」(詩「打身の床をいできたり」下書稿(二))、「あるひは葱緑と銀との縞を織り/また錫病と伯林青」(詩「津軽海峡」)、「筒袖は…色典雅なる葱緑なるを」(詩「会食」)と登場する「葱緑」を単純に青(みがかった)緑色と解するのは、検討を要する。また、「緑褐色の平たい岬」(詩「三原〔第〕三部」)とある「緑褐色」は、「緑みがかった褐色。ただし、実際の色調としては、オリーブ色や灰みのオリーブ色程度のものにいう。」(武井, 1973)とされている。

#### (6) 黄 yellow :

・檸檬色 lemon yellow (例：硫黄(口絵1)・雄黄(口絵7))  
Orpimentの和名とされる「雄黄」は、中国語 鷄冠石, As<sub>4</sub>S<sub>4</sub>(口絵6)の別称で、「雌黄」または「石黄」を用い

るのが望ましいとされる。いずれにしても次項の「橙黄」の事例とすべきであろう。作品では、「レモンいろして」(注：「淡い客車の光廓」(詩「山火」下書稿(一))と登場する。

・橙黄 orange yellow (例：雄黄 As<sub>2</sub>S<sub>3</sub> (口絵7))

砒素の硫化物で、赤みを帯びた黄色を呈する。童話『グスコブドリの伝記』の「五 イーハトーフ火山局」の場面「その室の右手の壁いっぱい、イーハトーフ全体の地図が、美しく色どった大きな模型に作ってあって、鉄道も町も川も野原もみんな一目でわかるようになっており、そのまん中を走るせぼねのような山脈と、海岸に沿って縁をとったようになっている山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつくっている一列の山々には、みんな赤や橙や黄のあかりがついていて、それがかわるがわる色が変わったりジーンと蝉のように鳴ったり、数字が現われたり消えたりしているのです。」とある。

・硫黄 sulphur yellow (例：硫黄(口絵1))

また、事例の「硫黄」を用いた黄色い空の表現に詩「硫黄色した天球を」がある。

・藁黄 straw yellow (淡黄色。例：黄玉(口絵26))

・臘黄 wax yellow (褐色を帯びた黝黄色。例：閃垂鉛鋳(口絵5)・蛋白石)

・蜜黄 honey yellow (赤色及び褐色を混ぜる黄色。例：方解石(口絵20))

・酒黄 wine yellow (例：黄玉(口絵26)・蛍石(口絵11))

・クリーム黄 cream yellow (例：石髓)

事例の石髓 lithomarge (リソマージ) は、玄武岩などの長石に富む岩石が風化してできた緻密なカオリンを主とする柔らかい粘土状堆積物をいう。この語は現在では、赤色あるいは紫色がかかった粘土質の堆積物を意味する。

・赭黄 ochre yellow (褐色を帯びた黄色。土状の褐鉄鋳(口絵13))

#### (7) 紅 red :

「崖いっぱいの萱の根株が/妖しい紅をくゆらしたり」(詩「凍雨」)の用例がある。

・洋紅 carmine red (純粋の紅色。例：紅玉)

「洋紅」は、「カルミン」「カーミン」「カーマイン」とも称され、「コチニル紅」とほぼ同義である。作品には事例の紅玉(ルビー)はよく登場するが、この色名の用例はない。

・火紅 aurora/fire red (黄色を混ぜる。例：鷄冠石(口絵6)の一種)

事例の鷄冠石, AsSの色合いは、「朝暎紅色」とある。

「朝暎」は、「朝日(朝陽)」のこと。そもそも「暎」の訓読みが「あさひ」であるが、作品にこの用例はない。

・風信子紅 hyacinth red (黄褐色を帯びた紅色。例: 柘榴石・風信子鉱)

事例の風信子鉱は、ジルコン $ZrSiO_4$ のことである。母岩の火成岩の貫入時期によって色はさまざまであるが、新第三紀中新世のものは赤褐色を呈するものが多い。「夜すがら温き春雨に、風信子紅華の十六は、/黒き葡萄と噴きいでて、雫かまやきむらがりぬ。」(詩「日本球根商會が」とある。

・瓦紅 brick red (例: 雑鹵・碧玉)

事例の「雑鹵石は種々の硫酸塩類の混合物」「肉赤色乃至煉瓦赤色・・・」また、「碧玉」は「酸化鉄により紅色」と記され、佐渡産のものを「赤玉又は紅石と称し」とあるが、作品にこの用例はない。

・緋紅 scarlet red (黄色を帯びた美紅色。例: 辰砂(口絵9))

事例の辰砂、 $HgS$ の色合いは、「コチニル紅あるいは朱紅色、しばしば褐赤又は鉛黝色に傾く」とある。作品にこの用例はない。「コチニル紅」参照。

・血紅色 blood red (黄色を帯びた暗紅色。例: 紅榴石)

柘榴石の固溶体の1種である紅榴石(苦礬柘榴石 pyrope,  $Mg_3Al_2(SiO_4)_3$ )の色は、「概ね血赤色」と記されている。作品では、「血紅の火」(詩「山火」)、「薄い血紅瑪瑙」(詩「薙露青」)の用例がある。

・肉紅 flesh red (例: 長石・菱満俺鉱(口絵21))

事例の菱満俺鉱 rhodochrosite は、 $MnCO_3$ からなるが、作品にこの用例はない。

・コチニル紅 cochineal red

古くからある顔料・染料である「臙脂」は、植物性の「正臙脂」(紅花から色素を採る)と動物性の「生臙脂」の2種類があり、後者の「コチニル紅」の方がやや赤みが強い。これは、メキシコのサボテンに寄生するコチニルカイガラ虫(カイガラムシ科の昆虫エンジムシ)からエタノールで抽出した鮮明な紅色染料である。作品には『春と修羅第三集』に「おい/けとばすな/けとばすな/なあんだたうとう/すっきりとしたコチニルレッド/ぎっしり白い菌糸の網/こんな色彩の鮮明なものは/この森ぢゅうにあとはない/あゝムスカリン」(詩「おい/けとばすな」)と(毒キノコの色合いに用い、「およそ凜々しきコチニル→洋紅と」(詩「天狗草 けとばし了へば」下書稿(二))と登場する。特に色彩学を学んだわけでもない賢治が、この語をどこで知ったか今となっては調べようもないが、やはり

この「鉱物性色彩語」から知った可能性がある。なお、「ムスカリン」は、ベニテングタケやテングタケなどの有毒キノコに含まれるアルカロイド(植物由来の窒素を含む有機塩基類)である。

・薔薇紅 rose red (例: 薔薇石英)

事例の薔薇石英 rosy quartz は、「紅白色ないし薔薇色を呈す。これ酸化チタンあるいは有機物のために色付けられたるなり。」と説明されている。「薔薇紅」そのものの色名は作品中に登場しないが、「薔薇色」はよく出てくる。「紅石英」(口絵15)「紅玉髓」(口絵17)と同義。

・深紅 crimson red (例: 紅玉) 作品にこの用例はない。

・櫻紅 cherry red (青褐色を帯びた暗紅色。例: 尖晶石(スピネル)・碧玉(ジャスパー) 作品中にこの用例はない。

・朝紅 morning red (例: 鶏冠石(口絵6)) 作品中にこの用例はない。

・褐紅 brownish red (例: 碧玉・褐鉄鉱(口絵13)) 作品中に用例はない。

## (8) 褐 brown :

「褐の海藻」「褐昆布」(『歌稿A・B』560)などの色合いはこれに近い。

作品中の「褐」の表現は、「(工場の煙突から出る煙)黒、褐、黄、灰、白、無色。」(童話『グスコブドリの伝記』)、「(サンムトリ山の噴火)黄色や褐色の煙」(ダリヤの色)「赤、黄、白、黒、紫、褐のあらゆるもの」(詩「ダリヤ品評会席上」)、「(はんの木の)褐の房」(詩「風が吹き風が吹き」下書稿(一)(二)(三))、「褐の雄ばな」(詩「冬のスケッチ」八)、「褐砂」(詩「オホーツク挽歌」)などと登場する。「褐色」の表現は、「農場の褐色や/林の藍」(詩「小岩井農場 第五綴」)、「去年の堅い褐色のすがれ(注: 枯草)」(短編『秋田街道』)、「落葉松の下枝はもう褐色になってゐたのです。」(『ビヂテリアン大祭』)、「(滝で)「水の流れる所は苔は青く流れない所は褐色だ。」(童話『台川』)、「褐色の毬果」(「あけがたになり」)、「山脈の褐色のケバ」(短編『花椰菜』)、「(栗の木の)「褐色の梢」(詩「地主」)、「根ぎはの朽ちの褐なれば/どう枯れ病をうたがへり」(詩「りんごのみきのはいのひかり」)、「褐色の夢をくゆらす砂」(詩「みあげた」)、「褐色の梟」(童話『二十六夜』)、「(牛の)褐色のひとみ」(『歌稿A 35』)などがある。「起伏を走る緑のどてのうつくしさ/ヴァンダイク褐にふちどられ」(詩「種山ヶ原」下書稿(一))や「春のヴァンダイクブラウン」(詩「小岩井農場 パート4」)と出てくる「ヴァンダイク褐」は、本来は植物質の分解物(腐食質)に近い土性物質(炭化し

た褐炭や泥炭などから作られた有機天然土性顔料である。17世紀に活躍したベルギーの画家で、宗教画・肖像画の名手として知られるヴァン・ダイクの作品における暗褐色の色調効果が絶妙であったことからややくすんだ茶色に用いられる。英語の色名Vandyke brownは彼の死後の1850年にできたものである。藤原(1936)は「濃焦茶色」としている。

・栗褐 chestnut brown (純粹の褐色。例：半蛋白石)

事例の「半蛋白石」は、「Semi-opalは明乃至不透明、光沢に乏しく、屢不純物の為に赤・褐・黄緑等に強く色附けらる。」とあり、このうち褐色の色合いのものを示すのだろうが、賢治作品に用例はない。

・髮褐 hair brown (例：木蛋白石)

事例の木蛋白石 wood-opalは、「樹木の蛋白石(一部は玉髓)に化したものにして、尚其の特有なる繊維構造を保存す。」とあり、賢治作品に色名の用例はないが、書簡にある。

・木褐 wood brown (朽木のような褐色。例：褐炭(口絵33)) 賢治作品には直接の用例はないが、賢治らが盛岡高農での地質調査の『報告書』における洪積層の記述の中で「処々二埋木ヲ包蔵」とある。(読者の便のために以下「褐黒」の項と一部重複) いわゆる「イギリス海岸」(北上川小舟渡付近)で賢治が化石バタぐるみ採集を手伝った東北帝大の早坂一郎の大正4(1915)年の卒業論文「仙台広瀬川河床の埋もれ木について」(英文)がある。当時から広瀬川産の仙台亜炭を用いた埋もれ木細工は有名だった。佐藤(1925)で、「亜炭は・・・炭化の程度高からずして、褐炭と埋木との中間にある性質を有し、木理猶判然として存し、石炭に乏しき地方に於ては、岩木又は木炭と稱して盛んに採掘せらる。」と説明されている。「亜炭」は、ほぼ「褐炭」に含まれるが、行政上名づけられた日本独自の名称である。「亜炭のかげら」「半分石炭に変わった大きな木の根株」(散文『イギリス海岸』)、「褐炭のけむり」(詩「岩手軽便鉄道の一月」下書稿)、「褐の炭燃す炉」(詩「冬スケッチ」一、二下書稿)、「亜炭の火」(詩「早春」)同下書稿で「褐の炭燃す」。同下書稿(三)では「はた褐炭の赤き火ならず」と登場する。当時、低品位の石炭を日常的に燃料として用いた経験が反映されているのであろう。「珪化木」(口絵19)の色調もこれに準ずる。

・肝褐 liver brown (やや緑色を帯びた褐色。例：碧玉・半蛋白石) 賢治作品に直接の用例はないが、「緑褐(色)」の用例が近い。「杉のいちいちの緑褐の房」(詩「風と杉」)、「松木がおかしな緑褐に/丘のうしろとふもとに生

えて」(詩「小岩井農場パート一」)、「緑褐に膨らんだ/おそろしい杉の梢を鳴らす」(詩「嬰兒」下書稿(一))、「緑褐色の松並」(詩「寅吉山の来たのなだらで」)、「緑褐色の平たい岬」(詩「三原」[第]三部)とある。さらに鉱物や岩石にも通底する色の変化でもある。すなわち、本来「青(緑)色」を呈する新鮮な鉱物や岩石が、風化変質して「褐色」を呈し、他の変質鉱物に変わっていく様の表現である。「褐やまたオリーヴいろの/なめ石の門のしたにて」(詩「水と濃きなだれの風や」下書稿(二))のように登場し、他にも橄欖岩・蛇紋岩の風化の色調にも使用されている。

・黄褐 yellowish brown (例：碧玉) 賢治作品に用例はない。

・黒褐 blackish brown (例：瀝青炭) 事例の瀝青炭(黒炭) Black Coalは「有機質の構造を明かに認る」と記されている。作品中では、「黒褐の腐食」(詩「種山ヶ原」下書稿(一))と出てくる。

## 文 献

- 天沢退次郎・金子 務・鈴木貞美編(2010) 宮澤賢治イーターゴザ学事典。弘文堂、東京、687p.
- 青木正博・加藤碩一(2015) 宮澤賢治が学んだ鉱物標本。GSJ地質ニュース、本号口絵。
- 藤原嘉藤治(1936) 註解に就て。知性、第二巻第三号。(続橋達雄編(1990) 宮澤賢治研究資料集成 第1巻、日本図書センター、東京、328-338。)
- 原 子朗編著(1989) 宮澤賢治語彙辞典。東京書籍、東京、1443p.
- 原 子朗(1999) 新 宮澤賢治語彙辞典。東京書籍、東京、929p.
- 原 子朗(2013) 定本 宮澤賢治語彙辞典。東京書籍、東京、943p.
- 畑山 博(1996) 銀河鉄道/魂への旅。PHP研究所、東京、294p.
- 一戸直藏(1913) 通俗講義 天文學上巻。大鏡閣、東京、340p.
- 一戸直藏(1920) 通俗講義 天文學下巻。大鏡閣、東京、306p.
- 加藤碩一(2011) 宮澤賢治地学用語辞典 愛智出版、東京、460p.
- 木下龜城・石井清彦 青山信雄・赤木 健・村山賢一・佐藤戈止・鈴木達夫編(1943) 英和和英 鑛物辞典。大観堂、東京、427+128p.

- 北出幸男 (2010) 宮沢賢治と天然宝石. 蒼弓社, 東京, 269p.
- 小林房太郎 (1925) 最新地文學精義. 教育圖書普及會, 705p.
- 松本榮三郎纂譯 (1881) 鑛物小學 全. 錦森閣, 東京, 35p.
- 諸橋轍次・渡辺末吾・鎌田 正・米山寅太郎 (1979) 新漢和辞典 (四訂版). 大修館, 東京, 1087p.
- 大藤幹夫 (1993) 宮沢賢治童話における色彩語の研究 [改訂版]. 日本図書センター, 東京, 114p. (付「作品別対象別色彩語分類表」).
- 斎藤文一 (1996) 銀河系と宮沢賢治—落葉広葉樹林帯の思想. 国文社, 東京, 257p.
- 佐藤傳藏 (1913) 大鑛物學上卷. 六盟館, 東京, 259p.
- 佐藤傳藏 (1915) 大鑛物學中卷. 六盟館, 東京, 298p.
- 佐藤傳藏 (1918) 大鑛物學下卷. 六盟館, 東京, 418p.
- 佐藤傳藏 (1923) 岩石地質學. 六盟館, 東京, 396p.
- 佐藤傳藏 (1925) 増訂改版 岩石地質學. 荻原星文館, 東京, 534p.
- 芹沢俊介 (1996) 宮沢賢治の宇宙を歩く—童話・詩を読みとく鍵. 角川書店, 東京, 264p.
- 武井邦彦 (1973) 日本色彩事典. 笠間書院, 東京, 189p.
- 
- KATO Hirokazu (2015) Mineral color-words in the works of Miyazawa Kenji.
- 

(受付: 2015年3月23日)